



神戸市

震災からの復興の過程で 育まれた「お互いを助け合う心」

UDを軸に展開する 協働と参画のまちづくり



「こうべユニバーサルデザイン」教員用テキスト



神戸市長 矢田立郎氏

アクションプランで実現する 協働と参画のまちづくり

8月17～19日に神戸国際展示場で行われた「第3回ユニバーサルデザイン全国大会」には、全国各地から予想をはるかに上回る来場者があり、大成功だったと伺っています。

初めに、神戸のまちづくりとユニバーサルデザインの取り組みについて、お話を聞かせください。

矢田 阪神・淡路大震災から10年が過ぎました。これまでは多くの市民の意識は

ユニバーサルデザイン研究会」や市民でつくる「こうべUD広場」の取り組みにつながっていきました。

神戸のユニバーサルデザインの特徴は、まさしく市民が中心となって進めているということですね。

児童のUDのアイデアを設計に 取り入れた池田小学校

今回の全国大会の会場を見ても、市民や企業、大学、行政が連携して、さまざまな取り組みが行われているのが分かります。

矢田 当然のことですが、まちづくりを進めるうえで一番大切なのは、市民の意識だと思います。まず第一に、地域に住む人々が自分のまちを誇りに思うこと。そこから、自分たちのまちをより良くしたいという熱い想いが生まれるんです。そして、どうすれば自分たちのまちはより良くなるのか？ ということを考えたとき、ユニバーサルデザインの視点、障害者や高齢者をはじめ、すべての人が安全で快適に暮らし、社会参加できるまちづくりという考え方が大切になるのだと思います。

ユニバーサルな社会を実現するためには、まず市民一人ひとりの意識の中にUDの考え方を広めていかないとはいけません。

震災からの復興ということに向けられていましたが、いまは次にどういう神戸をつくっていくのかという想いを強くしている方が多いんです。いろんな方からたくさん意見をいただきました。それから一度、市民のみなさんと一緒に2010年の神戸の将来像を考えようということで、1年半をかけて「神戸2010ビジョン」を策定しました。

神戸づくりの基本姿勢として「協働と参画のもとに、市民の暮らしをまもる」を掲げ、その中で5つの重点テーマを設定しました。そのテーマのひとつが「人

ん。まちをつくる人、その人づくりが大切なのだと思います。

未来の神戸を担う子どもたちにも、やはりユニバーサルデザインという考え方を学んでもらわないといけないので、市立の小・中学校では、教員用のUDテキストを作成するとともに、「総合的な学習の時間」等を活用したUD学習を行っています。「まちのUD探検」や「モノのUD学習」などを通して、実際に人にやさしい「UDのまち神戸」のあり方を見て、なるほどこれがめざしているユニバーサル社会の実例なのか、ということを実感してもらえよう取り組んでいます。長田区の池田小学校では、実際に児童のUDのアイデアを設計に取り入れて、新校舎がつけられました。

地域の特色を活かし、 市民の力で展開する ユニバーサルなまちづくり

今回、「長田に来ればUDがわかる」ツアーに参加させていただきましたが、地域の独自性を発揮して、市民が主体となってまちづくりが行われていますね。

矢田 神戸には9つの区がありますが、私は就任以来、各区が独自性を持つような取り組みを進めています。それぞれの



長田発こうべユニバーサルデザインフェア表彰式



UD学習に取り組む小学生



第1回「こうべUD広場」の定例会議



北野町広場の車いす観覧スペース



低床化された観光シティーバス



「長田に来ればUDがわかる」ツアー参加者のみなさん



しあわせの村のサインチェックをする「こうべUD広場」のメンバー



三宮駅地下街をUDチェックする「こうべUD広場」のメンバー



神戸空港島(南上空より)

が互いに思い合いの心をもち助け合うことであるとし、住民やお店が一緒になって、思い合いのまちづくりを進めていくためのヒント集を作成するなど、みなさん熱心に取り組んでおられます。

UD化で、すべての人にとって使いやすい「神戸空港」

ユニバーサル社会実現に向けた、これから将来の取り組みについて、お聞かせいただけますか。

矢田 現在、ポートアイランド沖の海上

に建設中の神戸空港は、世界で初めてのユニバーサルデザイン空港をめざして整備を進めています。国土交通省が現在、実験を進めている「自律移動支援」というプロジェクトがあるんですが、このユビキタスのシステムを来年2月16日の開港に間に合うよう整備しているところです。

空港ターミナルビルの通路などにICタグなどの通信機器を設置し、利用客の携帯端末（ユビキタス・コミュニケーションター）に搭乗に必要な情報を送信するんで

す。音声と画像の両方で情報が得られますから、目の不自由な方や耳の不自由な方も、自分の位置を確認しながら、案内に従って目的地に移動できます。高齢者や障害者、外国人の方、すべての人にとって使いやすい空港になればと考えています。

区が横並びではダメで、それぞれの地区が自分たち独自の発想で企画・立案し、自分たちで実行するから、いくらかの予算をつけてほしいということであれば、その事業計画を見せていただいて、検討し、助成をするという仕組みになっています。事業予算の全額を市が負担するわけではなく、地域や民間企業の協力も得て、連携して事業をやるうという形であれば支援は惜しみません。

例えば、中央区に北野・山本地区という場所があるんですが、ここは坂の町なんです。普通の人でも息が切れる坂ですから、高齢者の方にとっては非常にづらいんです。しかもたくさん観光客の方も来られる。このままではダメだということ、地元の方が中心となって「北野・山本ユニバーサルプロジェクト検討会議」を設置し、行政と協働でユニバーサルデザインの視点を取り入れたまちづくりに取り組んでいます。

町の構造そのものを根本から変えるわけにはいきませんが、例えばトイレを広く使いやすく改良したり、歩道の段差をなくしたり、坂道に休憩ベンチを設置したり、案内サインを多言語化したりと、できることから少しずつ改良されています。

そして、何よりも大切なのは、みんな



UDチェックをする「北野・山本地区をまわり、そだてる会」のメンバー



照明のスイッチを押す



ドアを開ける



受話器を取る



駐車券を取る



木村氏が出掛けるときは必ず同伴するシンシア



補助犬同伴可のステッカー



バリアフリー化した阪急逆瀬川駅エレベーター



宝塚駅周辺の歩道も障害当事者を交えて調査され、バリアフリー化が進められている

ど、福祉のまちづくりの一環として、早くから介助犬の普及・啓発活動に取り組んできた。兵庫県でも、宝塚市のステッカーを採用して県内に配布。2000年には「兵庫県介助犬同伴利用促進要綱」を定め、県内の公共施設への介助犬の同伴が認められた。国でも1999年には「介助犬を推進する議員の会（現在は、身体障害者補助犬を推進する議員の会）」が設立。勉強会を重ねるなど紆余曲折を経て、ようやく2002年、視覚障害者を介助する盲導犬、聴覚障害者を介助する聴導犬と介助犬を包括する形で「身体障害者補助犬法」が制定・施行され、公共施設・公共交通機関、デパートなどの民間施設では「補助犬の同伴を拒んではならない」と義務づけられた。

「補助犬はペットではなく、障害者が当たり前前に生活を送るためにどうしても必要な生きた自助具だと考えてほしいんで

「介助犬支援プロジェクト」は介助犬の支援活動を越えて、さらに広がりを見せている。宝塚市では、2000年の「高齢者、身体障害者等の公共交通機関を利用した移動の円滑化の促進に関する法律（交通バリアフリー法）」の制定をふまえて、翌年の第4次宝塚市総合計画の基本目標に「安全で快適なまちづくり」を掲げ、その中の重点プロジェクトとして「シンシアのまちプロジェクト」を推進している。高齢者や障害のある人、妊産婦、乳幼児を連れた人などすべての人にとって、安全で円滑に、かつ快適に移動ができ、外

出や交流がしやすいまちづくりを目指し、鉄道駅舎構内外において、エレベーター等を設置するなどバリアフリー化を進めている。「シンシアは木村さんという障害のある人を助け、ともに生活している。そしてそれを支援しようというボランティア活動にまで広がって、法制化にまで至りました。そのことをみんなが知って、理解して、さらに協力して支援する。そういうまち、社会が誰にとっても住みやすいんです。今後も市民や企業とも協働して、助け合いの気持ちを大切にしたまちづくりを進めていきたいですね」

市の障害福祉課の井上忍さんは語った。シンシアも今年12歳を迎えるのを期に引退の予定で、現在シンシアの後継者となる候補犬が訓練中だという。第2、第3のシンシアが当たり前に活躍できるユニバーサルな社会が訪れる日も遠くはないのかもしれない。



木村佳友夫妻とシンシア

全国に先駆けて1981年には「福祉都市整備要綱」を制定し、福祉のまちづくりを掲げる宝塚市に、まちづくりのシンボルになっている介助犬がいる。ドラマ「シンシア」介助犬誕生ものがたり」にも取り上げられたラブラドル・レトリバー種のシンシアだ。介助犬とは体の不自由な人の手や足の代わりになって、落としたものを拾って渡す、ドアを開ける、エレベーターのボタンを押す等、障害者の指示する介助を行うよう訓練される犬で、現在全国で29頭の介助犬が認定されている（2005年8月現在）。

シンシアの飼い主は木村佳友さん。1987年にオートバイの事故がもとで、頸骨髄を損傷し、下半身が不自由になり、車いす

1998年、新聞各紙が木村さんとシンシアの問題を取り上げたのをきっかけに、宝塚市では翌年「介助犬支援プロジェクト」を設置。介助犬のハーネス（胴輪）購入費用の助成を決定したほか「介助犬同伴可」のステッカーを作成し、市内の飲食店に配布するな



宝塚市

介助犬シンシアと ともに歩んでいく

福祉のまちづくり

障害のある人の社会参加を支える介助犬

全国の先駆けて1981年には「福祉都市整備要綱」を制定し、福祉のまちづくりを掲げる宝塚市に、まちづくりのシンボルになっている介助犬がいる。ドラマ「シンシア」介助犬誕生ものがたり」にも取り上げられたラブラドル・レトリバー種のシンシアだ。介助犬とは体の不自由な人の手や足の代わりになって、落としたものを拾って渡す、ドアを開ける、エレベーターのボタンを押す等、障害者の指示する介助を行うよう訓練される犬で、現在全国で29頭の介助犬が認定されている（2005年8月現在）。

の生活を送っている。シンシアも最初はペットとして飼い始めたが、東京の介助犬育成団体で介助作業や社会参加のために必要な訓練を受けて、1996年に介助犬となった。当時は日本で認定されている介助犬は10頭足らず。法律の裏付けもなく、公共の交通機関やレストランを利用したいと思っても、断られることが多かったという。盲導犬は道路交法で「目の見えないものはつえを携行するか盲導犬を連れていなければならぬ」と明記されていたが、介助犬については法的な根拠はなく、ペットと同様の扱いだだったという。

全国に広がる介助犬支援の輪

1998年、新聞各紙が木村さんとシンシアの問題を取り上げたのをきっかけに、宝塚市では翌年「介助犬支援プロジェクト」を設置。介助犬のハーネス（胴輪）購入費用の助成を決定したほか「介助犬同伴可」のステッカーを作成し、市内の飲食店に配布するな



小学生用副読本「グッドガール! シンシア」



淡路島

地域の伝統文化の再生がめざす

「心に花咲く島づくり」



ムクノキの巨木の下で語らう山田脩二氏と淡路島アートフェスティバルに参加していた地元高校生



瓦師 山田脩二氏

自然と共生し、快適な生活環境
づくりをめざす「淡路景観園芸学校」

沖繩本島、奄美大島、佐渡島、対馬につき、日本では5番目に大きい島で、瀬戸内海の豊かな海と温暖な気候に恵まれ、古くから栄えた淡路島。この島は、タイルや素麺、真珠核の製造などの伝統産業も盛んで、なかでも線香と淡路「いぶし瓦」は日本一の生産を誇ることも知られている。

古くからの歴史と文化を持つ淡路も近年は、日本全国の「地方」と名のつく他の地域と同様、人口の流出による高齢化や過疎化に頭を悩めていた。また、1995年の阪神・淡路大震災では島内全域が大きな被害を受け、抜本的な地域の再生に向けた方策が模索されていた。そのようななか、豊かな気候風土を活かした「世界に開かれた公園島づくり」を復興と再生の目標に掲げた淡路では1999年、島内北淡町に兵庫県立淡路

路景観園芸学校が開校。翌年には明石海峡大橋の開通を機に、「国際園芸・造園博覧会」がパンフレット2000が開催され、淡路島は自然と共生したまちづくり、環境づくりのモデル地域として大きな注目を集めている。

いぶし瓦の復活で淡路の文化を発信する

「淡路の地域社会、地場産業を考えたときに問題なのは、人が育っていないことです。景観園芸学校も、せっかく淡路で学んだのに、卒業したらみんな島から出ていくんじゃないでしょうか。淡路に根付いて、淡路の文化を世界に発信できる人材が育つかどうか。それがこれからの課題です」と語るのは、瓦師の山田脩二さん。特異な写真家として知られていたが、今から23年前に家族とともに淡路島に移住し、淡路伝統のいぶし瓦の生産に一人取り組み始めた。地方分権や地域の再生が叫ばれるはるか以前に、経済発展の名の下に個性を失う地域の文化、景観を憂い、一地方から日本文化の再生に身を投じた。

その後は、単なる屋根葺き素材としての瓦から、いぶし瓦独特の風味を活かした現代的な建築素材として瓦の可能性を提案。今では「カワラマン」、淡路の文化を最も考えるアーティストとして、さまざまな提言を行っている。2000年には、



民家の庭先に並ぶオブジェ



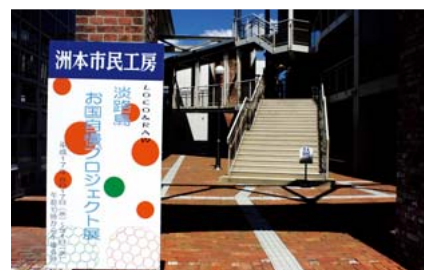
石田邸(外観)

島内の有志とともに淡路デザイン会議を設立し、「淡路・島づくり宣言」を行い、「近き人喜べば遠き人来る、心に花咲く島づくり」を目標に、豊かな淡路の文化を発信し続けている。

空き屋の再生で地域の資源を再発見する

「心に花咲く島づくり」は、着実に住民のなかにも定着しているようだ。今年行われた「淡路島アートフェスティバル」では、震災や過疎化で廃屋や空き家となっていた伝統的な4軒の民家を舞台にさまざまなアート・プロジェクトを展開。住民を巻き込んで、地域の景観の再生と新たな価値の創造に取り組んでいる。

舞台となった空き屋の再生に取り組んだのは、景観園芸学校教授の竹田直樹さんと卒業後、島に移住した上田博文さん。4軒の空



アートフェスティバルの会場にもなっている洲本市民工房



洲本市民工房(外観)



山田脩二作/西淡町西路公園「青海波ピラミッド」

「山田脩二の軌跡」写真、瓦、炭、「展」が開催される。淡路の文化の持つポテンシャルを発信し続ける一人の芸術家の生き様から、本質的な地域再生の戦略が見えてくる。